

16 【さるなし】

村はずれの駄菓子屋（だがしや）で、完ちゃんをみかけました。

完ちゃんは、駄菓子の代金を、ねぎっているのです。

「ばあちゃん、昔はべっぴんだったやろ」

「わかるんかい」

「そらあ、いまでも、いくらかべっぴんだもの。五円まけろや」

「十円の菓子、五円まけろたあ、半額（はんがく）にせいってことか」

「十円玉には穴があいてない。五円玉には丸い穴があいとる。丸くおさめろという、めいれいや」

完ちゃんは五円玉を、ばあちゃんにわたします。

「誰が命令したんか」

「そらあ、神さんや」

「神さんならしかたねえ。売る売る売るぞい。だが気をつけろや、その菓子は、おばけ菓子じゃからな」

「なんちゅう菓子や」

「おめえは、菓子の名もしらんで、くいたいんか」

「こんぺいとうでも、かりんとうでも、ないことは、しっとる」

「金平糖みたいに、安い菓子じゃねえ。こいつは【さるなし】じゃ、本当は、五円玉が百個ねえと、くえねえ」

「【さるなし】じゃと。ばあちゃんが、猿からかっぱらった菓子かい」

「ひとぎきの悪いこと、いうもんじゃねえ。これは、猿が猿酒つくつとるあいまに、くつとる梨じゃ。だから猿梨じゃ。猿亡しともいうな。猿がこれくつて、よく死ぬから猿亡しじゃ。こわいおばけ菓子じゃ」

そういつている、ばあちゃんの顔のほうがこわい。

「人間でも死ぬんかい」

完ちゃんは、とうぜんの質問をしています。

「猿が死んで、人間が死なんわけがねえ」

「だどもさ、猿は生でくうんじゃろ。人間は砂糖（さとう）づけを、くうんじゃろ。死にゃあせん」

「屁理屈（へりくつ）いう餓鬼（がき）じゃのう。まあええから、くつてみい」

「おう、さるなしがこわくて、人間できるかってことよ」

完ちゃんはぼくのところにくと、【さるなし】をさしだした。

すきとおったふくろに、うすい緑色をした、梅干しくらいの大きさのやつが、十個ほどはいっている。

「金ちゃんに、ぜんぶあげるよ」

「ぜんぶかい。はんぶんでいいよ」

完ちゃんと、ふたりでたべれば、こわくない。

それで、完ちゃんと半分ずつ、たべたものです。

ものの五分とたたずに、腹が痛みだし、それから、はげしい下痢（げり）。

ふたりとも、便所にいくひまもないので、みちばたで下痢下痢やりました。

何かい下痢したかわからないけれども、ようやく落ちついてきてから、懐爺のところに行きました。

「金ちゃんと完ちゃん、【さるなし】たべましたね。おばけ菓子を」

「くうたくうた」

「あんなうめえもん、はじめてくうた」

「おいしい話にも、おいしい菓子にも、毒（どく）がある。あのおばけ菓子は、便秘（べんぴ）になったひとが、たべるものですよ」

「おばけ菓子たあ、冗談かとおもうたが、ばあちゃん、ほんとのこというたんじゃな」

完ちゃんが、感心したふうな、いいかたをします。

完ちゃんほど素直じゃないぼくは、文句をいいます。

「おばけなんか、ふつううるかい。おばけをうるばあちゃんは、おばけじゃないんか」

懐爺にきくと、

「あれれ、金ちゃんたら、あのおばあちゃん、おばけなの、知ってるんですか。【うるうるばあちゃん】というおばけで、たしかもう、三百歳になるはずですよ」

「それは、すげえ」

「それは、すげえ」

ぼくは、完ちゃんといっしょに声をあげました。

「そういえば、【すげえ】というおばけが、村にやってきたの、知ってますか」

「しらん」

「しらん」

「それでは、みてきたらいいでしょう。【うるうるばあちゃん】の駄菓子屋の、むかいの空き小屋にすみついた、ということですよ」

「どんなおばけなんじゃ」

「特徴（とくちょう）ですか。目が、あの空の色をしている。背が、その杉の木くらいある。足が、うらの竹やぶの竹くらい長い。それと、声が、雲雀（ひばり）そっくりの、あいらしさ。そんなところですか」

「つまり、その、でっかい、おばけ、ちゅう、ことじゃろ」